

「Atlas of Gastroenterologic Endoscopy

by High-Resolution Video-Endoscope

群馬県立がんセンター 長廻 紘
獨協医科大学・病理 藤盛 孝博
虎の門病院・消化器科 星原 芳雄
東京大学医学部・外科 田淵 正文

編集

東京女子医科大学教授・消化器内視鏡科

鈴木 茂

医学の領域でも、その時代が要求している斬新な書物を作るということは大変重要であるし、大変難しいことでもあります。ことに英文の学術書を出版することは並大抵のことではできません。この度、藤盛孝博、星原芳雄、田淵正文の3先生と共同編集でAtlasを出版された長廻紘先生は、この仕事をいとも簡単に、そして的確に成し遂げるすばらしい才能をお持ちの方だと、いつも感嘆しております。だから先生の出版される書物は、時宜を得た、簡潔なもので、多くの読者に歓迎されるのです。

本書も先生のこの哲学のような思想から作り出された、大変簡略で、わかりやすいAtlasであります。ここには食道から大腸までの高解像(high-resolution)内視鏡写真が美しく、実に鮮明に大きく印刷され、英文の解説はあくまで簡略に、必要最低限ですましているのは何ともあり

がたいものです。医学書のAtlasというものは、何といても、そこに揚げられている写真が生命であります。本書の内視鏡写真は見事なものばかりです。そもそも、通常の拡大内視鏡の写真はコマ全面が焦点よく、求めるものが的確に捕らえられているものが少なく、大きく引き伸ばしても満足できるものを撮るのに大変苦労することは、多くの内視鏡医が経験していることです。

わが国の消化器内視鏡学のレベルは世界のトップにあり、それが日本国内のどこに行っても高く維持されているということをご承知のとおりです。しかし、このことが必ずしも諸外国に正当に評価されているとは限りません。それは現在の消化器内視鏡学に携わる私ども内視鏡医の責任でもあります。そこには言語という大きな障壁があるからであります。本書のような学術書がより多く出版されることで、この障壁が消

え、欧米の臨床家にわが国のレベルを正当に評価していただくことができるのです。

一方、拡大内視鏡は消化管粘膜の病態を病理の顕微鏡観察に近い水準で、表面から捕らえようとするものでありますし、走査電顕像とをつなぐ役目も果たすものであると理解されます。その意味では、今後ますます発展する領域でもあります。そして、これを支えるのは解像力の優れた高解像内視鏡を提供して下さるメーカーの技術であります。私どもは幸いにもこの優れた機械とそれを使いこなす技術が身近にあることに感謝しなければなりません。

本書をじっくり読んで、高解像内視鏡とは何かをこれからの若き内視鏡医が学んでほしいと思います。

● A4 頁170 図7 カラー写真273
表1 1998 定価(本体15,000
円+税) 円400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)